神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A study of YuShuangYiCangQu in peking university collection

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 陳, 暁, CHEN, Xiao
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2331

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

北京大学蔵『玉霜簃藏曲』の言語について
—『十全福』を中心に—*

陳　暁

1. はじめに

清代の北京語を反映する資料としては、主に白話小説、西洋人が編んだ中国語教科書、明治時代の中国語教科書、朝鮮王朝時代の中国語教科書、満漢合璧文献、正音資料、そして各種の曲芸資料等がある。しかし、戯曲はこれまであまり利用されてこなかった。その原因は、清代の戯曲が、元明の戯曲に倣ってやや古めかしい言葉遣いをするのが一般的であり、当時の言語をそのまま表しているとは言えないとされてきたことによる。

しかし、中には清代の北京語を反映する戯曲も存在する。本稿では、北京大学蔵『玉霜簃藏曲』についての紹介を行うとともに、そこで使用された言語の様相を示してみたいと思う。

2.『玉霜簃藏曲』の概況

2.1『玉霜簃藏曲』とは

『玉霜簃藏曲』は様々な戯曲の集成であり、本来は伝統劇俳優程硯秋（1904-1958、字は玉霜）の蔵書だったものである。2005 年に程硯秋の遺族がその一部を北京大学に売却し、現在は北京大学図書館の貴重図書となっている。以下の記述は、筆者が北京大学大学院博士課程の期間に、指導教授王洪君先生の仲介により原本を調査した結果に基づく。

『玉霜簃藏曲』は全て写本であり、清代の順治年間（17 世紀中葉）から民国初期（20 世紀前半）にかけてのものである。およそ 1961 冊が現存し、一冊ごとに程硯秋の印章「玉霜簃藏曲」が捺されている。中には、俳優が

*本研究は JSPS 科研費 JP15F15304 の助成を受けたものである。

使用する台本や工尺譜、あるいは「身段」（しぐさ）を示したものも含まれており、戯曲史上極めて貴重な資料群と言うことができる。作品としては『太平錢』（順治七年、1650）、『金印記』（康熙十七年、1678）、『金蘭誼』（雍正七年、1729）、『彩毫記』（乾隆六十年、1795）、『西廂記』（嘉慶三年、1798）、『尋親記』（道光元年、1821）、『三国志』（咸豐八年、1858）、『十全福』（同治元年、1862）、『西遊記』（光緒六年、1880）、『浣沙記』（民国七年、1918）等多くの種類が含まれている。いずれも写本であり、その中には筆写が粗略で、読みにくい字が含まれるものも少なくない。また、全体の一部のみが存する残本もある。

2.2 俳優の使用する台本

『玉霜簃藏曲』はすべて当時の俳優が使用する舞台用の台本であるため、台詞の前に役名を示すか、あるいは役ごとに分けて一冊ずつ作るという形を取る。例えば『西遊記・安天會』（年代不詳）には表紙に「猴子」とあり、これはこの一冊がすべて「猴子」という役の担当する台詞であることを示している。その他に工尺譜（漢字を用いた楽譜）もあり、斜め格のある専門の用紙により工尺を記録している。

2.3 言語の様相

『玉霜簃藏曲』所収の戯曲は昆曲が主体であるが、「丑」、「浄」や「外」という役は「插科打諢」（滑稽な身ぶりや言葉で観客を笑わせる）が主な役回りであるため、台詞に北方語を用いたものが少なくない。全体的には、元明の戯曲に倣ってやや古めかしい言葉遣いをするのが一般的であり[1]、その語彙や文法には元明の戯曲とよく似た成分が見られる。例えば次のような具合である[2]。

①襯字“也麼”

『蝴蝶夢』（丙子年[3]）：「少不得重赴祭央會上，再結同心帶裙<u>也么</u>釵，恁且自思來。」

②助詞“也麼哥”

『琵琶記・墜馬』（道光年間）：「丑：險些兒跌折了腿<u>也么歌</u>，險些兒撞破了頭<u>也么哥</u>。」

---

[1] 清・金埴の筆記『不下帯編巾箱説』には次のような記述がある：「戯曲至隋唐始盛，……唐謂之梨園樂……元人雑戯則有十二科名目……<u>今優人登場□演古戯今戯者，多法元人院本，不能出其範圍十二科之外</u>。」（巻四，中华书局 1982：75）

[2] 以下の引用において、俗字・異体字は原本のまま表記する。

[3] 清代において「丙子年」にあたる候補は四つある：1696 年、1756 年、1816 年、1876 年。

③“每”が複数を表す

『才人福』（道光元年、1821）:「生：你每兩個的言語我一些也不解。」

『百順記』（康熙三十三年、1694）一:「外：媳婦每不敢擅便，特請公婆作主。」

④助詞“来”

『獅吼記』（光緒年間）:「外：待我閃過一邊，聽他說些什么來。」

『西廂記』（嘉慶年間）:「旦白：他罪你什么來。」

⑤助詞“則箇”

『百順記』（乾隆元年、1736）二:「生：你們一個磨墨一個拂紙，待我寫字則箇。」

⑥介詞“着”

『西遊記（猴子）』（年代不詳）:「玉帝真真知趣，曉得俺老孫愛吃果子的，着我看守着這桃園。」

⑦“兀的+不”で反問の語気を表す

『十全福』（同治元年、1862）:「兀的不痛殺人也！」

台詞の部分で注目すべき点は、同一の作品で年代が異なるテキストの場合に、恐らく観客にとって分かりやすいものとするために、多少表現を変えている部分があることである。例えば次のような具合である。

『千金記・拜将』（同治四年、1865）:

丑：大家前去觀看一回。

『千金記・拜将』（光緒十八年、1892）:

丑：我們大家去看一看。

『伏虎韜』（光緒二十一年、1895）

卒：且等他哭完了再講，如今哭完了請到縣中走罢。

合：我不甚識你，吓只為他貪財賣妾，逼死人命……後再三二日再來。

『伏虎韜』（年代不詳）

卒：且把他哭完了再講，如今哭完了請到縣中走罢。

合：我不認識你，吓只為他貪財賣妾，逼死人命……再後三兩日再來。

『蝴蝶梦』（丙子年[4]）

生：咳，不是冤家不聚頭，冤家相聚幾時休。早知死後無情意，索把生前恩愛勾。你道他說些什么來。

占：他怎么樣講呢？

生：不像你每男子死了一個妻子又娶上一個，出了一個又對一個，況且你又

[4] 注 3 を参照。

不曾死，可不冤殺了人。……
生：咳，只是可惜。
占：可惜什么來。
『蝴蝶梦』（光緒十年、1884）：
生：咳，不是冤家不聚頭，冤家相聚幾時休。早知死後無情樣，索把恩情一筆勾。你道他說些什么。
旦：他怎么樣講呢？
生：不像你們男子死了一個又討一個，出了一個又對一個，況又不曾死，可不枉殺人呵。……
生：咳，只是可惜。
旦：可惜什么。

上例のうち、『千金記・拜将』について言えば、1892 年本の「我們大家去看一看」は 1865 年本の「大家前去觀看一回」よりも口語性が強い。『伏虎韜』の二つのテキストでは、「我不認識你」は「我不甚識你」よりも、また「三兩日」は「三二日」よりも口語性が強い。丙子年の『蝴蝶梦』はどの「丙子」か不明であるが、いずれも光緒十年（1884）よりは早い[5]。光緒十年の『蝴蝶梦』では助詞の「来」を消し、「毎」の代わりに「們」で複数を表している。これらはいずれも古めかしい表現を改訂した例と考えることができる。

3. 同治元年写本『十全福』

3.1『十全福』の概況

『玉霜簃藏曲』の中でも、本稿で特に論じたいのは『十全福』である。『十全福』は全六本、四十四齣、冊大は 255mm×134mm。「十全福頭本目録」、「十全福二本目録」のように、一冊ごとに冒頭に目次が記載されている。毎冊 44～60 葉で、半葉はおよそ 6 行、毎行 25 字程度である。全文に朱筆による句読が施されており、配役名は小字でかつ朱筆の括弧が付され、曲牌名は朱筆で一字ごとに丸で囲まれる（書影参照）。字はあまり流麗ではないものの、はっきりと書かれている。俗字や誤字が少なくない。

第六本の最終葉に「同治元年十一月十七日學古篆伶人陳金雀煦堂抄錄完竣」という記載があり、「同治元年」は 1862 年である。陳金雀は原名陳双貴、字は煦堂、嘉慶年間の生まれ、原籍は蘇州である。彼は幼い頃より昆

[5] 注 3 を参照。

曲を学び始め、その後蘇州織造府によって選ばれると、北京に送られ、昆曲の俳優として名を成した。中でも昆曲『金雀記』は北京での評判が極めて高かったため、皇宮に招かれ、嘉慶帝のためにそれを上演した。嘉慶帝は大いに喜び、彼に「金雀」の名を賜ったという。陳金雀の娘の一人は梅巧玲の妻となったが、梅巧玲とは名優梅蘭芳（1894-1961）の祖父である。『玉霜簃藏曲』の中には、陳壽豐（陳金雀の子）、陳嘉梁（陳金雀の孫）が抄録した写本も少なくなく、陳金雀一族はいずれも演劇に関係が深いと言える。

『十全福』は、北京と揚州を舞台とする物語で、あらすじは以下の通り。林俊という書生は、北京で進士となり、刑部員外郎に任命されるが、国師の弾劾に失敗したため、免職されて揚州へと向かう。揚州には言吉交という人物がおり、林俊はその娘言小姐と婚約していたが、言吉交は林俊が免職されたと聞いて婚約を破棄する。林俊は伯父である王大人の家に身を寄せるほかなくなり、その後ある誘拐・殺人事件に巻き込まれて冤罪を蒙る。王夫人の下女愛玉と仰氏の姪妙玉は協力して真犯人である国師、桑長興、萬福を探し出し、林俊の罪は雪がれる。最後には言小姐、愛玉、妙玉の三人とも林俊の嫁となる。

3.2『十全福』の言語の様相

陳金雀の生涯から見て、『十全福』は北京で上演されたことが確実である[6]。その歌詞はやや文語的な言葉遣いをしている。台詞の部分は全体の三分の一ほどの割合を占めるが、林俊や言小姐など地位が高い人物の言葉は全体的に古めかしい。例えば次のような具合である。

林俊の歌詞：[謁金门]怀錦繡，挾策金门，求售藁榜，高登三甲首，姓字傳人口，一旦功名入手，好把时匡世救。

林俊の台詞：原来如此。咳，只是我老爺，性好風流，情耽花柳，最愛徵歌選色，酷喜倚翠偎紅，正妻不過以德容為重，如賓似友。

言小姐の台詞：我方才正要問你，言ㄜ帶刺，语ㄜ含機，不想我父乱命所逼，恨死晚矣。……妹子有何急事這等慌張。

一方、愛玉、妙玉、桑長興、仰氏など教養が浅く地位が低い人物の言葉は口語性が高いと考えられる。筆者が調査した約 50 種の中では、本作品の口語性が最も高く、純粋な北京の口語に近いものと考えられる。以下では、主に太田辰夫氏による北京語の指標を参照しつつ、その言語の様相を示し

[6] この点については斯维（2015）も参照。

てみたい。北京語を反映すると考えられる語彙や文法（下線部）を含む台詞の一部を次に引用する。

（頭本・留愛）

乳娘：公子不要乱跑，回來看栽着了。……

馨郎：愛玉快同我去頑兒去。……爹，你纳万安罢，狠是錯不了。

（二本・囑騙）

言吉交：今兒他到來了。

言瑞：阿一歪媽媽跑死了……老洪班人箱多來了。……

言吉交：還要唱甚的戲，快ㄜ兒滚下去罢。……

余鬍子：王老爹，我們明兒到貴寓磕頭賠罪，請下去罢。……

言吉交：恨極了我了。……只恨我当初瞎了眼，將女兒许配了廃人了。

（二本・旁惜）

愛玉：道兒上焦得个要死……誰知夫人二娘一見了我，就喜歡得个了不得。又听見我会了吹弹歌舞，这些个技藝，那裡还肯撒手，連忙吩咐我爹，教我住在内房。

（二本・邪約）

仰氏：現摆着這些看戲的太爺們在這裡，你丢我的醜，燥我的皮么。……你這幾天不做買賣，什么意思。……，你天天閑在家裡就有飯吃么。……臭娼婦，這么个热天你也忍得過，听他這么哭法。……这是現摆着銀子，不去挐，可不傻了么。

（二本・廟閧）

桑長興：我闷得慌，不上去。

仰氏：你坑死我了，上去罢。……

妙玉：我告訴你纳罢，我也有点子心事。……

仰氏：你再強，我个又要打了。

妙玉：你就是打死我，我是不睡定的了。……

仰氏：敢是你心上有什么不完的事，想要了局么。……

妙玉：我越想越恨，还得找補幾下。……這如今四更了，也不來的了，我个也要去睡了。……怎么胡兒八道，換了丧良心，弄得我心里糊里糊塗方才弄了个希乎脳子爛乱騰騰。……

仰氏：娼婦，賊在那里？這么炸庙。

妙玉：什么炸庙，我親眼看見一個人在你纳房里出來，还抱着个孩子，嘴裡自己嚷拏賊，碰我一個大觔斗，開了大门去了。……阿一哇，波罗盖多跌破了……真个了不得。

（四本・送辱）

愛玉：我也不同你抬这些死杠，讓了你罢。……扯淡，这才是狗挐耗子，多管闲事，林相公有事，与你什么相干。……这个告诉你罢，林相公是我家的人，这才想方法救他，為什么連你们多要救出来，放屁不臭。
妙玉：咳，我与你前輩子，是什么冤家，恨得我这么个利害。
（五本・暗護）
桑長興：什么，我靠本事吃飯，拉笼朋友箅什么事兒。咳，就是要飯，也是穷人後门，你動不動薄我，我是要飯的花子，哥哥，你招架着罢。
萬福：你有什么本事？
桑長興：我的本事多着的呢。
（五本・覿罵）
妙玉：什么本事？
桑長興：哪，拍花。
妙玉：什么拍花，你也配。
桑長興：什么配，我是国师親口，傳授咒語，還有一道灵符，照着孩子這么一拍，跟我就走。……不要說是大人，就是假老老，也得跟我走。
妙玉：是了，我前日个，就是他们的人，拍我的了。……
桑長興：有人好试，偺们兩个人拍誰呢？……我好容易学来的，这么教你了，好自在话。……照着孩子頂心，这么一拍。
（五本・幻救）
妙玉：我的媽耶，栽死我了。……吓，你是王府上，和我抬損的姐姐，
　　你怎么也在此？……
愛玉：這么说，昝们兩个不是冤家了。……咳，慌什么，你揔不用言語，依我答应。……年輕的，只有昝們両。……這才是好机会救林相公，正在這个當兒里，难遇見的，隨我來。……他是才到這裡，甚么兒不会。……我有一点小頑意兒，会弹弹，又会唱唱清曲。
（六本・淫逃）
桑長興：事不宜遲，前後揔是一刀，說也是白說，殺殺！
仰氏：罢了，說不得伸得長長兒的脖子，给你殺罢。……
桑長興：阿呀，我的卤蛋，宝貝，我下得手么，但是放了你，我也站不住了。……
仰氏：依着我，一点也不难……趁這當兒，偺们兩，逃往他州郡，好圖下半輩子過活，好不好。
（六本・察情閧觀）
萬福：呔，丧良心，你本要飯花子，如今豐衣足食，你怎么到来害我。
桑長興：呸，你開口要飯，閉口要飯，箅你引荐進府，也不見怎的不勾

交過，太爺走了，怎么羕。

萬福：你既要走，各人走罢了，怎么我的銀子你偷了去？……

桑長興：列位，不要听他，拐子頭兒就是国师，他就是国师的包里人，不見的嬰兒，都是他騙去的，你們打出乱兒來，有我。

以上の台詞は特に口語性が強いと考えられ、全篇を通じて北京語の特徴を示す語彙や文法が少なくない。以下にそれを論じてみよう。

3.2.1「北京語の七指標」

太田辰夫氏の「北京語の七指標」（1969）に照らした場合の状況は以下の通りである。

1）一人称代詞の包括形（inclusive）と除外形（exclusive）を「咱們」「我們」で区別する。

「余鬍子：王老爹，我們明兒到貴寓磕頭賠罪，請下去罢。」及び「趁這當兒，偺们兩，逃往他州郡，好圖下半輩子過活，好不好。」「愛玉：年輕的，只有昝們両。」等の用例があり、この二つは明確に区別されている。特に「咱（偺昝喒）們」の用例は非常に多い。

2）介詞「給」を有する。

「仰氏：罢了，說不得伸得長長兒的脖子，给你殺罢。」等の用例がある。

3）助詞「来着」を用いる。

「来着」の用例はない。

4）助詞「哩」を用いず「呢」を用いる。

「呢」については「桑長興：我的本事多着的呢。」等の用例があり、「哩」については「仰氏：你去睡你的，我还要乘凉一回児凉哩。」等の用例がある。「哩」と「呢」は共に使われているが、「呢」の用例の方が多い。

5）禁止の副詞「別」を有する。

「仰氏：你放手，我不逃走，別死了我了。」という用例が見られるが、ここでの「別」が禁止を表しているとは断言できない[7]。

6）程度副詞「很」を状語に用いる。

「狠」を用いた例として「馨郎：爹，你纳万安罢，狠是錯不了。」がある。

7）「～多了」を形容詞の後におき「ずっと」「はるかに」の意を表す。

「～多了」の用例はない。

以上の七指標のうち、『十全福』は「包括形と除外形」、「介詞「給」」、「「呢」を用いる」及び「程度副詞「很」」の四つを確実に満たすが、禁止の副詞「別」

[7] ここは仰氏が夫に浮気を疑われ、捕まって尋問されている場面である。

については疑問が残る。しかし、七指標のうち 1）～6）が最も北京語の特徴として相応しいとされており[8]、『十全福』も割合としては少なくないと言えるだろう。

3.2.2「清代の北京語について」

太田氏の「清代の北京語について」（1950）に照らした場合、『十全福』には以下のような用例が見られる。

1）「日、裏」の代わりに「児」を使う。

「言吉交：今兒他到來了。」「余鬍子：王老爹，我們明兒到貴寓磕頭賠罪，請下去罢。」等の「日→児」の用例があるが、「裏→児」は用例がない。

2）第二人称の敬称として「您」を使う。

「您」の用例はないが、「你納」「你能」「你那」の用例は非常に多い：「妙玉：我等着你納，千萬不要忘了。」「妙玉：你能也是白想他了。」「桑長興：你那說話，一點也不錯。」

3）「俩」を使う。

「俩」は「两」とも書かれるが、「两個」の合音であることは確実である：「仰氏：趁這當兒，偺们兩，逃往他州郡，好圖下半輩子過活，好不好。」「愛玉：年輕的只有咱們両。」

4）「多喒」を使う。

「栢華：我這一躲不定多喒才能勾出來。」等の用例がある。

5）「……是（似）的」を使う。

「言吉交：咳，甚的意思，又不死人，到像号喪是的一樣抱頭大哭。」等の用例がある。

6）「……的慌」を使う。

「桑長興：我闷得慌，不上去。」のように、「的」を「得」で表した例がある。

7）得（dei）を使う。

「妙玉：我越想越恨，还得找補幾下。」「桑長興：不要說是大人，就是假老老也得跟我走。」など、用例は少なくない。

8）句末助詞「罢」「罢了」。

この二つの用例も非常に多い：「余鬍子：王老爹，我們明兒到貴寓磕頭賠罪，請下去罢。」「愛玉：你也進去吃點飯去罢。」「萬福：你既要走，各人走罢了，怎么我的銀子你偷了去？」など。なお、「罢」で推測の語気を表す用

[8] 山田忠司（2015：196）を参照。

例もある：「言吉交：我在這塊瞧你的來意，不要還是林俊讬你來的罢？」

3.2.3 他の北京語の特徴

以下では、太田氏の「北京語の文法特点」(1964) 及び筆者自身の研究 (2014) に基づき、『十全福』における他の北京語の特徴を検討する[9]。

1）名詞接尾辞「児」

『十全福』では上に見たように「日」の代わりに「児」を使うだけでなく、他の「児」も数多く現れる。

道兒上焦得个要死。　　一點兒也不錯。

挨着城根兒要飯，正摸不着門兒。

我趁這當兒去瞧瞧。　　我有一点小頑意兒，会弹弹。

他是才到這裡，甚么兒也不會。

2）再帰代名詞（reflexive pronoun）として「各人」を使う。

萬福：你既要走，各人走罢了，怎么我的銀子你偷了去？

3）不可能を表す複合動詞「～不了」。

馨郎：爹，你纳万安罢，狠是錯不了。

桑長興：交給我錯不了。

4）「去」を用いる連動文において「去」は VP の後に置く。

馨郎：愛玉快同我去頑兒去。

嬰孩：媽媽說得是，我們都去吃飯去。

衆人：一発胡说了，拿到当官理論去。

このタイプの用例はさほど多くなく、VP の前に置く方が割合としては多い。

5）反複疑問文は「VP＋不 V」を用い、南方語の「V 不 VP」と異なる。

これは北京語だけの特徴ではなく、北方語全体の特徴と言えが、『十全福』の台詞で VP を含む反複疑問文の現れる頻度は非常に低く、用例も少ない。

仰氏：你丢了我兒子，不去找回來，到來嘲笑我，打你這臭蹄子。你找還兄弟不找？

6）「da」を動詞接尾辞とする。

桑長興：我也想出去溜搭溜搭。

---

[9] 以下に挙げる諸特徴のうち、1）～9）及び 12）は太田（1964）、他は拙稿（2014）に基づく。また、10）のうち「敢情」、「敢自」は太田（1964）、「敢則」、「敢是」は拙稿（2014）によるものである。

7）介詞「打」が起点を表す。

妙玉：咦，孩子多養了，這說打那裡來的。

妙玉：等太陽落了，我就打林相公來的去處跳牆進公館去便了。

8）副詞「光」が「ただ…ばかり」の意味を表す。

愛玉：人來人去，怎么光栽在你納身上呢？

9）「底根兒（根底兒）」「起根兒」が副詞として「元々」の意味を表す。

桑長興：我起根兒就是這付嘴臉的么。

妙玉：根底兒是和尚的老婆現在啥是道士的相好。

10）副詞「敢情」、「敢自」、「敢則」、「敢是」が「道理で」、「元々」等の意味を表す。

『十全福』では「敢是」で表現することが多い。

仰氏：敢是你心上有什么不完的事，想要了局么。

趙一壇：敢是與小弟弟頑兒。

11）「老老」が「年配の女性」の意味を表す。

桑長興：不要說是大人，就是假老老也得跟我走。

12）「了不得」を「大変だ」、「非常に」の意味で用いる。南方語では「不得了」を使う。

愛玉：誰知夫人二娘一見了我，就喜歡得个了不得。

栢華：勞駕，勞駕，了不得。姑娘我是抬不住了，只好逃走的了。

13）「言語」が「言う」を表す。

愛玉：咳，慌什么，你揔不用言語，依我答应。

妙玉：林相公为什么不言語？

14）「走道兒」が「歩く」を表す。

萬福：驢子肏的走道兒這么走么！

15）「找補」が「付け足す」を表す。

妙玉：我越想越恨，还得找補幾下。

16）「真個（兒）」が「確かに」を表す。

妙玉：真个了不得。

桑長興：真個兒打起来了么？

17）「悄沒聲兒」が「静かに」を表す。

萬福：呸，悄沒聲兒的罢！真是坑死我了。

18）「臨了兒」が「最後になって」を表す。

妙玉：臨了兒要睡了，把個兄弟又丟了。

19）「撺掇」が「おだてる」を表す。

趙一壇：呸，拿奸是你撺掇我，這時候又是你叫我放他走么！

20）「抬杠（損）」が「言い争う」を表す。

妙玉：你是王府上，和我抬損的姐姐，你怎么也在此？

愛玉：我和你瞎抬什么杠，我進去了。

21）「白饒」が「むだになる」を表す

愛玉：我想言吉交，是個勢利小人，斷了他的婚，就是冤家了，托他也是白饒。

22）「回来」が「少し後に」、「まもなく」を表す。

乳娘：公子不要乱跑，回來看栽着了。

23）「不差什么」が「そろそろ」を表す。

桑長興：不差什么，有二更天了罢。

24）「嚼裹」が「生活の費用」を表す。

『十全福』では「交過」で表す。

桑長興：你開口要飯，閉口要飯，箅你引荐進府，也不見怎的不勾交過。

25）「劳叨」が「ぶつぶつ言う」を表す。

妙玉：再没有这么劳叨的了。

以上のように、『十全福』の台詞には北京語の特徴を反映する語彙や文法が確実に存在し、それは特に社会的地位が低い役の台詞において顕著であるということができる。ただ、注意しなければならないのは、戯曲の言語には様々な制約や伝統があるため、いわゆる京味小説[10]や教科書類と比べると、その北京語が必ずしも純粋でない可能性もあることである。例えば、北京語の最も重要な特徴の一つである助詞「来着」の例がないことや、禁止の副詞「别」の存在を断言できないことなどについては、そうした観点から説明することが可能である。

4. 『十全福』に北京語が見られる原因

『玉霜簃藏曲』におけるほとんどの作品は元明の戯曲に倣った言葉遣いをし、テキストや年代の違いにより、分かりやすい言葉に改訂した形跡もあるものの、全体としては古めかしい言葉遣いをしている。『十全福』のように、台詞に大量の北京語を使うのは非常に稀である。以下ではその原因について考えてみたい。

1）『十全福』は台詞の量がほかの作品よりも多い。

---

[10] 京味小説は北京語を用いて北京市民の文化や精神世界を描く小説であり、老舎（1899-1966）の作品がその代表格とされるが（钱理群・温儒敏・吴福辉 1998：271）、清末から民国初期における「白話報」所載の白話小説が起源という見解もある（崔志远 2010）。

『十全福』の台詞の量は全体の約三分の一であり、その割合は他の作品よりも多い。特に犯人である桑長興と萬福、及び下女愛玉が関わる部分は、歌詞がかなり少なく、台詞が大半である。伝統的な戯曲では「唱工」（歌の技巧）が最も重要で、台詞は少ないのが一般的であり、『十全福』のように大量の台詞があるのは珍しい。台詞がわずかしかない場合は、現れる語彙や文法の特徴も少なく、言語資料としては利用しにくい。例えば、残本『驚鴻』は楊貴妃の物語であり、劇中の高力士は「丑」であるため、台詞は北京語を用いているが、その文は非常に短く、量も少ないため、言語資料としての価値は低い。

2）年代や観衆の違いに応じた言葉遣いをする必要があった。

清・金埴の筆記『不下帯編巾箱説』（18 世紀前半）に次のような記述がある。

> 埴嘗謂洪昉四曰：“古今善惡之報，筆之於書以訓人，反不若演之於戲以感人為較易也。然則梨園一曲，原不徒為娛耳悅目而設，有志斯民者，誠欲移風易俗，則必自刪正，傳去奇始也。”（卷四，中华书局 1982：75）

また、清代の子弟書作品『郭棟兒』にも次のような一節がある。

> 上了場幾句詩篇俗派得很，粉紅字不敢斟酌含里含糊。形容那古人的相貌五官挪位，改變作今人的話語一味的村粗。……最可笑在座聽書多少位，靜悄悄鴉雀無聲咳嗽也無，說書的見人愛聽愈發得意，更把那諸般的醜態義託盤兒現出。……冷不防說一句歇後語，招的那滿座聽書的笑個足。……（『清蒙古車王府藏子弟書』1994：45-46）

「則必自刪正」、「改變作今人的話語一味的村粗」、「冷不防說一句歇後語」等の記述によれば、いつの時代にあっても言葉遣いを改訂し、観衆の機嫌をとる必要があったことが窺われる。先に述べたように、『十全福』が北京で上演されたことは確実であり、観衆も当然北京の人達である。しかも登場人物の桑長興には北京の友人がおり、その後北京から来た誘拐犯の萬福と知り合う。つまり、桑長興と萬福は北京と関係が深いわけで、北京語を使うのは当然のことであったと言える。

3）社会の雰囲気が「俗」なものになった。

清朝の後期になると、北京には様々な危機が起こり、北京の市民特に旗人の生活は苦しくなりつつあった。その苦しさを紛らわすには、精神を何物かに託す必要があり、それには俗文学がちょうどよい（陳 2014：26-28）。経済的な余裕がないために、教養も低くなった結果、彼らは俗文学を好むようになったと考えられる。社会の雰囲気が「俗」なものになると、文学や戯曲などの言葉も分かりやすい言葉になるという傾向が見られる（陳

2014：28-29）。これは上に引いた子弟書『郭棟兒』にある「改變作今人的話語一味的村粗」からも窺えるが、そのような雰囲気を記載した文献は他にも見られる。例えば、『皇朝經世文統編・八旗生計』に見られる道光5年（1825）大学士英和の奏上文によると、当時の旗人の生活が非常に苦しかったことが分かる。

我國家百八十餘年，旗民久已聯為一體，毫無畛域，漢人遊學游幕外出經商並無限制，駐防閒散又無例禁，何獨於京城而禁之。……旗人雖然產業不能得租，及經告理不能久待，仍屬無益……可用者習文習武仍不礙其上進，仍庸碌無能者農工商賈亦可以聽其謀生，雖使億年生齒日繁，而額兵不增，資生有路，則舊例意宜講求例意而不當一概徒嚴者也。（1980：1542-1543）

『燕京歳時記』（1906）では、咸豐年間（1851-1861）の旗人が戯曲を好み、「逸樂」になってしまったと記している。

內城無戲園，外城乃有。蓋恐八旗兵丁習于逸樂也。（1981：94）

また、先に引いた子弟書『郭棟兒』には、芸人が古人を描写する際に、当時の言葉に変えて通俗的な雰囲気を出したところ、観衆は喜んだと記されており、多くの人が「俗」な言葉、特に当時の粗野な言葉を好んでいたことがわかる。

さらに、子弟書『評昆論』では、「清音雅調」を好む人は当時すでに居場所がなくなっていたと述べている。

似我這布衣寒士自慚不類，惟慕愛清音雅調無處安身。……進園門一望院中車卸滿，到棚內遍觀茶座過千人。……順圍桌一溜兒擺開排着次序，論品級打頭跟二挨着碟兒聞。……安場已畢先生才上，好些個闊家恭維如見大賓……令諸公一句一誇一字一贊，眾心同悅眾口同音。（1994：49-50）

以上の各記述によれば、社会の雰囲気が変わったため、伝統を踏襲すべき戯曲であっても、台詞を俗語に改訂しなければならなかったのは自然なことであり、『十全福』もちょうどその雰囲気に応じたものかもしれない。台詞が分かりやすくなり、しかもやや露骨な部分もあるのは、「俗」の雰囲気に相応しいように思われる。

5. まとめ

本稿では『玉霜簃藏曲』の全体像を紹介するとともに、その中でも特に『十全福』を取り挙げて、その言語の様相について論じた。『十全福』の

言語は京味小説や教科書類に比べると、必ずしも純粋な北京語とは言えないかもしれないが、清代の北京語を反映する語彙や文法は確実に存在している。今後は、『玉霜簃藏曲』の他の作品も調査し、『十全福』のような作品が存在するかどうかを確認するとともに、その言語の様相について、更に詳しく考察したいと思う。

参考文献

太田辰夫（1950）「清代の北京語について」,『中国語学』34 号，pp.1-5。

太田辰夫（1954）「清代北京語語法研究の資料について」，『神戸外大論叢』2-1，pp.13-30。

太田辰夫（1958）『中国語歴史文法』，東京：江南書院。2014新装再版，京都：朋友書店。

太田辰夫（1964）「北京語の文法特点」，『久重福三郎先生・坂本一郎先生還暦記念中国研究』pp.37-55；1995『中国語文論集』（語学篇・元雑劇篇），東京：汲古書院，pp.243-265。

太田辰夫（1969）「近代漢語」,『中国語学新辞典』, 東京：光生館, pp.186-187；1988『中国語史通考』，東京：白帝社，pp.285-288。

太田辰夫（1975）「『児女英雄伝』の副詞」,『神戸外大論叢』26-3，pp.1-16；1988『中国語史通考』，東京：白帝社，pp.325-340。

山田忠司（2015）「北京话的特点——围绕太田博士提出的七个特点」,《现代汉语的历史研究》，杭州：浙江大学出版社，pp.191-198。

陈晓（2014）《基于清后期至民国初年北京话文献语料的个案研究》，北京大学博士学位论文。

崔志远（2010）《论京味小说》，《浙江师范大学学报》（社会科学版），第5期，pp.44-52。

北京市民族古籍整理出版规划小组（1994）《清蒙古车王府藏子弟书》，北京：国际文化出版公司。

顾学颉・王学奇（1983）《元曲释词》，北京：中国社会科学出版社。

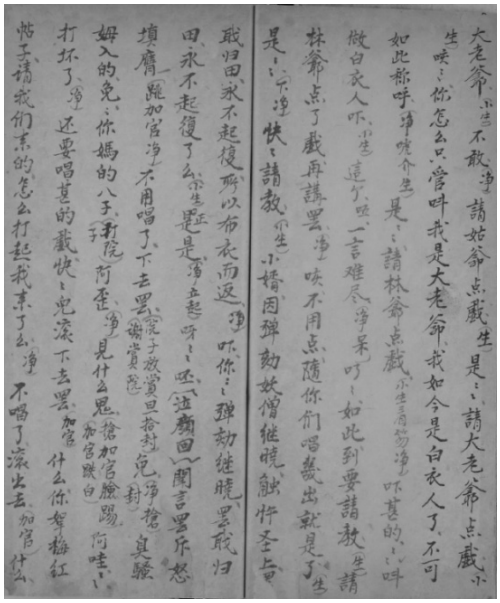
李修生主编（1997）《古本戏曲剧目提要》，北京：文化艺术出版社。

刘达科（2001）《董文焕<陈金雀传>摭谈——近代戏曲史料钩沉之一》，《山西大学师范学院学报》，第 4 期，pp.74-75。

钱理群・温儒敏・吴福辉（1998）《中国现代文学三十年》，北京：北京大学出版社。

斯维（2015）《玉霜簃旧藏陈金雀抄本<十全福>传奇研究》，《四川戏剧》，第 9 期，pp.75-86。

清・富察敦崇《燕京岁时记》，北京：北京古籍出版社，1981。
清・金埴《不下带编巾箱说》，《清代史料笔记丛刊》，北京：中华书局，1982。
清・邵之棠《皇朝经世文统编》，台北：台北文海出版社，1980。

Keywords:　戯曲　『玉霜簃藏曲』　『十全福』　北京語　清代

付：『十全福』書影